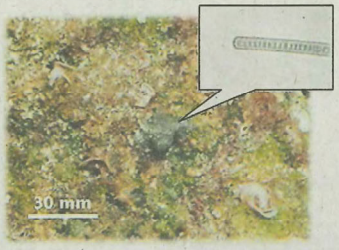
令和４年６月１４日（火）　東奥日報【２８面】

細胞増殖抑制 強力な新物質

慶大チーム 海洋生物から発見

抗がん剤応用期待

弘大・橋本教授 解析協力



沖縄のサンゴ礁から見つかった海洋シアノバクテリア（右上の顕微鏡写真）＝慶応大提供

慶応大大学院理工学研究科の研究チームは13日、沖縄のサンゴ礁に付着している原始的な生物「シアノバクテリア」から、抗がん剤への応用が期待できる化学物質を発見したと発表した。弘前大農学生命科学部の橋本勝教授の協力で同物質の分子構造を解析し、化学合成にも成功した。

研究では、採集した同生物から、細胞の増殖を抑制する新しい物質を発見し、イエゾシドと名付けた。カルシウムイオンポンプと呼ばれる細胞の機能を抑える力が、これまで世界中で発見された化学物質で2番目に強力という。

コンピューターによる分子構造解析では、橋本教授が解析データの読み解き方などを助言した。イエゾシドは比較的単純な分子構造でできているため、安く大量に合成可能という。研究には、公益財団法人がん研究会と東京大定量生命科学研究所も参画。8日に「米国化学会誌」のオンライン版で発表された。

チームを取りまとめる慶大の岩崎有紘専任講師は本紙取材に「これほど強い作用を持つ物質が沖縄の海洋生物から見つかったのは大きな驚き。分子構造解析の大家である橋本教授には、非常に綿密な指導をいただいた」と話した。

橋本教授は「米国化学会誌は、論文掲載が最も難しい化学誌の一つ。研究レベルの高さを示している」とチームを称賛した。（赤田和俊）

上記の画像は，当該ページに限って”東奥日報”が利用を許諾したものです。無断転載はできません。